

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、香川大学祭において、地域の子どもたちを楽しんでもらおうという目的で企画、運営しました。体育館に手作りテーマパークを作り、2007年11月3日、9:00～16:00の日程で、無料で子どもたちに開放しました。体育館の内外には4つのブースがあり、年齢、男女問わずに楽しめるものを、というコンセプトのもと、約一ヶ月かけてメンバー全員でアイデアを出し合い準備をしました。今年度は“夢”というテーマで4つのブースそれぞれが夢にちなんだ企画をしました。ゲームブースは、お菓子の家を作るゲームや、トンネルや新聞紙プールの道を宝を探しながら冒険していくゲームを行いました。滑り台ブースは、屋外に二階からの高さの巨大滑り台と屋内に幼児でも滑ることのできるミニ滑り台を作りました。迷路ブースは体育館の四分の一の広さの巨大迷路を不思議の国のアリスのお話に見立てて作りました。アート・クラフトブースでは壁一面に真っ白いキャンパスを用意し、子どもたちが自由に落書きできるコーナーを作り、さらにドラえもんのような道具を作ることのできる工作コーナーも設置しました。

これらの材料のほとんどはダンボールです。工作コーナーの材料も食品が入っていたトレーやお菓子の空き箱などをリサイクルしました。

2. 実施スケジュール

平成19年	10月2日	構成員全体での準備開始
	11月3日	子どもまつり開催

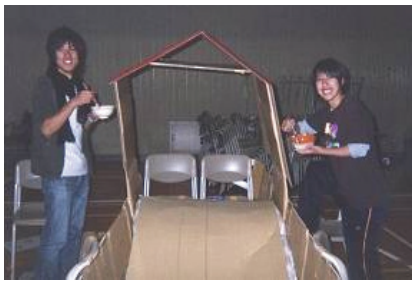
3. 成果の内容及びその分析・評価等

この子どもまつりには、子ども約580名、保護者約280名、合計860名が来場してくれました。主に小学生に向けて宣伝していたこともあり、来場者のほとんどは小学生でしたが、なかには、歩き始めたばかりの子どもなど小さい子どもも来てくれました。近年、来てくれる幼児が増えて来た、ということで、今年は何のブースにも小学生だけでなく、幼児にも楽しんでもらえるような場所を設けました。幼児と小学生の遊ぶ場をある程度分けた結果、体の大きさの違う両者がぶつかってけがをする心配もなく、どちらも安心して遊ぶことができたと思います。

私たちが用意した4つのブースはいずれも大人気でした。滑り台と迷路ブースには熱狂的なりピーターがたくさん現われ、ゲームブースには冒険の旅への出発を待つ長蛇の列ができていました。ア

ト・クラフトブースには、お昼ごはんを食べることも忘れて自分だけのオリジナル作品作りに熱中する子どもの姿がありました。開場から閉場まで子どもたちがとぎれることはなく体育館には常にぎやかな声が響いていました。

また、子どもまつりを開催したことにより、その日は大学祭全体に活気があったように思います。屋台を出していたある研究室の友人は、「この日（子どもまつり開催日）は、親子連れのお客さんがたくさん来てくれて大忙しだったよ」と話してくれました。さらに、子どもまつりに来てくれたのは、子どもやその保護者だけではありませんでした。高校生もきてくれたのです。もうすぐ大学生になる高校生に大学を見てもらい、香川大学の楽しさを知ってもらえることは、未来の香川大学にとって、とても大切なことではないでしょうか。



準備風景

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

この子どもまつりを実施したことにより、大学祭を訪れてくれる年齢層が広がり、地域の人たちが香川大学のことを知るきっかけになったと思います。大学生と子ども、そして保護者の方、といった世代を越えた交流をすることができました。また、子どもまつりに来てくれた子どもたちのなかには、初めて会った子どもたち同士、仲良く遊んでいる姿も見られました。核家族化が進む現代社会において、子どもまつりは、同年代の友だちや異年齢の友だちと新しい出会いの場になったのではないのでしょうか。遊んでいる子どもたちの楽しそうな表情や保護者の方からの言葉からそのように感じました。





当日の様子

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

子どもまつり当日、子どもたちの多さにびっくりしました。たった20分の休憩しかとらなくても、前日準備でほとんど寝てなくても、最後までみんなの笑顔が絶えなかったのは、子どもたちの楽しそうな笑顔と子どもが大好きな気持ち、そして同じ気持ちでいる仲間存在のおかげだと思います。10月から本格的に始まった子どもまつりの準備。最初は何をしようか、というところで迷い、悩み、何をするか決まった後もどのようにしたらもっと子どもたちに喜んでもらえるのだろうか、と迷い、悩みました。そのような、仲間たちと試行錯誤しながらの作業は大変でも有意義で、楽しいものでした。体育館が使えるようになってからは連日、朝から夜遅くまでの作業が続きました。授業の空きコマにも休む時間を惜しんで作業をしました。

近所の会社までリヤカーを引いてダンボールをもらいにいくと、「お、今年もまたがんばってるなあ」と快く大量のダンボールをくれた会社の方たちの優しさに感動したこともありました。子どもまつりを通じて学校や地域のあたたかさを感じることができました。

ペンキで服が汚れても気にもせず、寒い屋外での作業もへっちゃらで、そんなメンバーの一生懸命な姿がきらきら輝いて見えました。私たちは今、大学生でしかできないことをやっているのだな、と何度も思いました。お金をかけずに思いっきり楽しんでもらいたい、自分も楽しみたい、という気持ちと体力でこんなにも動き続けられるのはきっと今だけではないのか、今だからできるのではないのか、と感じました。

子どもまつりに向けて頑張ったこと、感謝の気持ちをもつこと、子どもたちや保護者やメンバーの笑顔は何年経っても色褪せることなく私を含めたメンバーの記憶の中にあるのだと思います。



6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今年も子どもまつりを開催し、無事に終わることができ、ほっとしています。今年もたくさんの子どもたちに来てもらえて本当に嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいです。子どもまつりは私たちのサークルでは毎年行われている行事です。毎年、子どもたちが帰った後には、全員で輪になって、今までの反省点や感想を述べて、この行事を検証しています。今年度も同じように検証が行われました。ここでは、もっと広い範囲に宣伝すべきだった、とか絵の具やガムテープなどの無駄ない使い方について、当日の自らの行動を振り返って気が付いたことなど様々なことが話し合われました。今年度は前年度の行事責任者同士が直接顔をあわせて情報を交換する機会を設けていなかったのが去年の良かった部分を今年に活かさできていませんでした。その一つが、ガムテープの強度です。去年はどこのメーカーのものが良いかいくつか試してから箱で買っていました。今年、ガムテープの質まで考えることができませんでした。主な材料がダンボールでそれらを形にいくためには欠かせないガムテープ、この子どもまつりの予算のなかでもかなりの割合を占めています。来年は新旧責任者で集まり、もう一度検証する機会を設けたいと思います。

良かったこととして挙げられたものの一つは、小さい子ども向けのコーナーを作ったことでした。安心して安全に遊べる空間作りの大切さを改めて感じました。また、今年、例年以上に安全面に気を配りました。子どもがけがをしないように企画・運営することはもちろん、もしも、子どもがけがをしたらどうするかをマニュアル化し、メンバー全員で確認しました。

今回、子どもまつりのためにお力を貸していただき、ありがとうございました。メンバー一同本当に感謝しております。

7. 実施メンバー

代表者 森岡 好の実（教育学部3年）

構成員	江上 侑希（工学部3年）	高畑 愛子（経済学部3年）
	柿田 和寿（工学部3年）	藤原 理恵（教育学部3年）
	國方 愛美（教育学部3年）	二川 翔子（教育学部3年）
	坂本 徹郎（経済学部3年）	松田 直哉（工学部3年）
	四方 愛歩（教育学部3年）	松本 彩佳（教育学部3年）
	米谷 将太（教育学部3年）	安藤 雅徳（教育学部2年）
	大野 彩佳（教育学部2年）	岡村 和樹（工学部2年）
	折田 祐希（教育学部2年）	貝川 佳恵（教育学部2年）
	葛西 良平（教育学部2年）	貴船 佳織（経済学部2年）
	小松 ゆり（経済学部2年）	佐々木 晃（教育学部2年）
	瀧原 未奈子（教育学部2年）	谷川 和歌子（教育学部2年）
	原田 えり（教育学部2年）	福田 泰佑（工学部2年）
	吉原 奈美（教育学部2年）	吉村 光貴（工学部2年）
	翠 さやか（教育学部2年）	青野 未緒（教育学部1年）
	石原 有里子（教育学部1年）	井上 友輔（教育学部1年）
	牛島 浩晃（工学部1年）	岡本 侑記（教育学部1年）

桂	雄人	(教育学部1年)	北本	竜樹	(経済学部1年)
幸山	将大	(教育学部1年)	佐堂	祐一	(教育学部1年)
水津	幸恵	(教育学部1年)	鈴木	貴也	(教育学部1年)
竹端	正伸	(教育学部1年)	廣岡	秀美	(教育学部1年)
藤原	達也	(経済学部1年)	前田	絵美	(教育学部1年)
正金	健一	(経済学部1年)	松川	知佳	(教育学部1年)
丸山	祐実	(教育学部1年)	三谷	裕太	(教育学部1年)

以上、47名